

高校教師の心得



第⑩回 授業の方法と評価



監修
服部 次郎

(はっとり・じろう) 東京女子体育大学・短期大学教授。筑波大学附属坂戸高等学校教諭、同校長、筑波大学教授などを経て、2006年4月から現職。全国高等学校長協会理事など公職を歴任している。

授業の基本は、 チョークと黒板と「しゃべり」

教師は、「授業する人」です。授業するための基本スキルとは何でしょうか？ それは、チョークで黒板に板書しながら、明るく元気にしゃべることです。

最近の教育方法の分野では視聴覚教材や情報機器活用の研究が盛んですが、若い教師にとってまず身に付けるべき基本スキルは、チョーク1本で板書しながら、分かりやすい説明で生徒に理解させることです。チョークで黒板に見やすい字を速く書くためにはちょっとした練習が必要ですし、はっきりと聞き取れる明瞭な「しゃべり」も、意識して身に付けなければならない技です。チョーク1本で板書事項を書き、さらには図表や地図を描きながら、明快なしゃべりで生徒の興味・関心をかき立てていく授業の達人は「チョークの魔術師」とさえ呼ばれます。

私が教育実習生にまず教えることは、「前を向いて、明るく元気にしゃべること」です。これができていれば、多少授業内容がおぼつかなくても教師になれます。最近の教員採用試験で

は模擬授業や場面指導が課されることが多いですが、これも「明るく元気にしゃべる」という教師の基本的資質があるかどうかを見るためのものです。

学力評価の方法

教師は、授業を行いつつその授業の評価を行わなければなりません。指導と評価は一体であって、教師は自分の指導が生徒の学力として定着しているかを評価によって確認しなければなりませんし、生徒は自分の学力がどのように定着しているかを評価によって知らなければなりません。高校では定期試験で評価を行うのが一般的です。

試験による学力評価は、その結果をどのような基準で解釈するかによって、相対評価と絶対評価に分けられます。少し前の小・中学校で行われていた相対評価は、所属する集団の中で位置付けをするものです。例えば、5段階評価で5と1が7%、4と2が24%、3が38%になるように試験の得点などに応じて配分します。試験を頑張った児童・生徒が大勢いても5の数は決まっているし、1も必ず付けなければなりません。この相対評価は学級内の過大な競争を生み出すということで、最近は絶対評価が重視されています。絶対評価は評価項目ごとの評価規準を定めて、それに到達しているかどうかで評価します。到達している生徒が多ければ、5が多くなってもいいのです。ただし、絶対評価には教員間や学校間で共通の評価規準を定めることが難しいという問題点があります。職員会議や教科会議で十分な審議を行い、各教師が公平性や客観性をしっかりと意識して評価することが大切です。

試験問題は苦勞して作るべき

試験問題を作成するときは、あくまでも自分の行った授業に準拠したオリジナルの問題を作成しなければなりません。授業にまじめに取り組んで、まじめに試験勉強をした生徒が良い成績を取れるような問題を、教師が自ら作成することが大切です。問題の作成は、部外者には分

からない大変な労力のいる仕事ですが、くれぐれも楽をしようとして既製の受験問題集などを丸写しすることのないようにしましょう。生徒が試験勉強に努力しているのと同じように、教師も試験問題作りに苦勞しなければなりません。

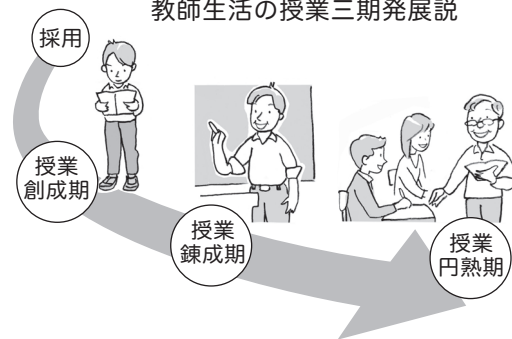
教師生活の授業三期発展説

前2回の本連載で、教師の仕事の中心は授業であり、授業に誠実に取り組むことが教師には最も大切なことだと述べてきました。それでは、教師は誰でも授業が好きかといえば、実はそういうわけでもありません。生涯を通じて変わらぬ情熱を持って授業に取り組んでいくことは大変なことで、教師の絶えざる努力が必要です。

教師生活を30年とすると、授業力の発展を目安にほぼ10年ごとの3期に区切れると思います。新規に採用され、必死に授業ノート（2009年11月号の本連載参照）の作成に取り組んでいく「授業創成期」、授業ノートが一応完成して落ち着いて授業ができるようになる「授業錬成期」、生徒の知的好奇心を引き出して当意即妙な達人の授業ができるようになる「授業円熟期」の3期です。

このうち、教師にとって難しいのは「授業錬成期」です。一通りの教材研究が済んで、落ち着いて授業ができるようになってくると、授業がルーティン化して手慣れてくる半面、手の抜き方も覚えてきます。この時期にさらに授業ノートの改善に取り組み、一段高い授業力を付けていく努力を続けるか、それを怠って使い古しの授業ノートでルーティン化した授業を続けていくかで、「授業円熟期」に入れるかそうでないかに分かれていくのです。

教師生活の授業三期発展説



「空き時間」を有効に活用する

授業は、教師にとって「やらねばならない仕事」であり、勤務の拘束時間です。「授業に穴を開ける（授業を休む）」ことは、教師社会では最もしてはならないことです。

ところで、教師の仕事には授業の合間の「空き時間」があります。空き時間には次の授業の準備をしたり、教材研究をしたり、ホームルーム運営や進路指導の計画を立てたりします。教師はこの空き時間を有効活用して、自己を高めていかねばなりません。しかし、現実はどう過ごすかは自由裁量に任されているため、中には空き時間を私的な休憩時間とはき違える教師もいないわけではありません。

教師の質を決めるのは「授業に臨む姿勢」です。ルーティン化したその場しのぎの授業をしたり、部活動の指導にかまけて授業をおろそかにするなど、授業の手を抜く教師はすべての面で教師失格です。教師が授業に熱意を持って臨んでいるかどうかを、生徒は鋭く見抜きます。生徒に「手抜き授業教師」の烙印らくいんを押された教師は、生徒指導やホームルーム指導などでも良い仕事はできません。

Point!

高校教師の「授業・評価」の心得

- まずは“チョーク1本”で授業するべき
- 試験問題作成には、試験勉強をする生徒と同じように苦勞するべき
- 授業への情熱を持ち続けるためには、生涯絶えざる努力が必要
- 教師の質を決めるのは、「授業に臨む姿勢」。何があっても授業には手を抜かない

☆次回は生徒指導を取り上げます。